



構造主義とは

昨日の始業集会の際、生徒指導主任の「防災の日」に関する話の中に、彼が体験したイタリアでの地震の話が出て来たせいか、あの集会のあと、何人かの先生方から、彼と一緒に旅行していたのかと聞かれた。たまたま同じ時期に出かけていただけで、もちろん別々の旅行である。ただ、同じ時期に同じ街に滞在する予定になっていたのも、もしかしたら出会うかもね…と話していたのは事実である（実際には出会わなかったが…ホッ！）。

＊

閑話休題。今回の現代文の試験範囲に「ことばとは何か」があり、その冒頭の文に「構造主義」という言葉が出てくる。現代思想の基本をなす思想で、興味のある人はぜひ調べてみて欲しいところだが、私たちに関係するごく簡単なレベルでいうと、評論文を読む時に注目する「対比関係」、つまり、二項対立という考え方が、この構造主義の考え方と密接に関連している。

さて、この「構造主義」について、実に簡単でありながら、分かりやすい解説があったので、「ことばとは何か」と関連させながら紹介してみよう。まずは引用。

＊

のちに「構造主義」という名で呼ばれることになる学術的方法論の基本的な理念はここに尽くされている。あらたえて列挙すれば、

- (1) 意識的な境域ではなく無意識的な境域に注意を向ける
- (2) 「実体」ではなく「関係」を分析の基礎とする
- (3) 「システム」という概念を導入する
- (4) 一般的法則の発見をめざす

この四項目である。

（難波江和英・内田樹『現代思想のパフォーマンス』光文社新書、2004）

＊

これは、「構造主義」の第一人者とされるフランスの人類学者、クロード・レヴィ＝ストロースの思想について解説した部分の一節である。

さて、この(1)～(4)の特色を、「ことばとは何か」と(ちょっと無理矢理ではあるが)関連させて復習してみよう。

まず、「カタログ言語観」が、「意識的に」存在している「もの」に名前をつけるといった「言語観」であることが分かるだろう。目の前に「丸くてモコモコした動物が来たので、アダムは「意識的に」羊と名付けたというわけだ。しかし、実は私たちは「無意識的に」身につけた言語によって「もの」を見ているのではないか、というのがこの評論の中心的な主張である。

教科書29ページの10行目以降で指摘されている話、例えば「ムートン」と「シープ」という語の「価値」は、羊という動物の「実体」によって決まっているのではなく、「差異」（つまり、他の語との「関係」）によって決まってくるというのが、引用の(2)に相当する。

そして、そもそも「言語」とは差異に依拠する「システム」である((3)に相当)ことを指摘したのがソシュールであり、その指摘を応用して、我々の社会に潜むさまざまな事象を広く研究した((4)に相当)のが「構造主義」の学者たちだったのである。